

来園、援農特集

皆さん、ありがとうございます!

まほろばだより

NO. 4570 17-153 10 / 6

ここは日本のフィンドホーン!!



●ここは日本の フィンドホーン

仁木のまほろば自然農園での農作業は、昨年来の希望でした。何よりもまず、訪問を受け入れてくださった、宮下ご夫妻に感謝いたします。

農園に到着すると、広大な「緑の海」が眼前に広がる。

宮下ご夫妻をはじめ、まほろばの皆様にあえたことが、何より嬉しい。

皆で輪になり、ミーティング。気合いが入る。

雨天続きの天候による農作業の遅れ。じゃがいもを収穫し、今日中にニンニクを植えなければ、と。「へうげ味噌」に入るツタンカーメンの豆サヤ取りが待っている。

じゃがいもの収穫は、機械で掘り起こしたものを、土を落とし、手作業で正品、B品と分け、コンテナに入れる。じゃがいもを選び分ける人、B品を集める人。



ツタンカーメン

ジャガイモの収穫を終え、今度は「へうげ味噌」に入るツタンカーメンの豆のサヤ取り。

乾いたサヤを手で摘み、カゴへ入れてゆく。

豆のサヤは「かくれんぼ」が上手い。社長が昨年書かれていた胡瓜の収穫はこのことだったのだ! なるほど。

「あ、こんなところにも」と作業しながら笑い合うのはなんと楽しいことだっただろう。

農作業は共同作業。あまりの楽しさに、「楽しい、楽しい」と声を上げずにはいられない。

「ここは日本のフィンドホーンだね」と、作業しながら合点する人幾人か。

この地の開かれたエネルギーは、日本では別世界のようだ。遠くの山々に囲まれた仁木農園の

新家 江里香

コアシンクロニズム等自然療法士

米国公認マッサージ・セラピスト

アシュタンガヨガ・インストラクター



開放性のエネルギーは、穏やかで優しい。

「抱かれた開放性」と言えようか。

開放されたスペースは、エネルギーの流れを良くする。

それに誘われ、野菜が伸び伸びと育つてゆく。

仁木農園の土はフカフカだ。この抱かれた開放性の下で、五感が刺激され、各々の感覚と関連する地水火風空のエネルギーが調えられて行くのが分かる。

「癒される」とは、まさにこれと言うのだと思う。

大切に育てられ、いのちの歓びにあふれた野菜。生命力の完全なる発露。

なんと美しく、愛らしいことか。



「人間は感情を消化できない」と師口バートは言う。食生活や生活様式は勿論のこと、現代の不可解な病気

は、愛やいのちの足りないモノを食してきた結果なのかもしれない。

食するモノがどのような環境で育っているのか。

愛や命の歓びに溢れているのか。それとも愛に乾き、それを欲しているのか。

私たち自身の心のありようが大切であることは言うまでもないが、私たちは、食物という物質レベルのものを通じて、それをとりまく上位レベルのものをも消化し、身体化していると思う。

まほろばの味噌、醤油、野菜は、どれも最高のもの。
水もよし、土もよし、種もよし、作り手も、地のエネルギーもよし。大根は最高に甘い。
カボチャはホクホク、キュウリのシャキシャキ感はなんとも言えない。

私のセッションを受けに来て下さった方々は、「子どもたちは本当に違いが分かる。
エリクサー水や まほろばの醤油、野菜は本当においしい、と言う」と伝えて下さる。
次世代へと、既に橋が渡されていることを素晴らしいと思う。
宮下ご夫妻をはじめ、まほろばの皆様が、三十年以上もかけて架けて下さった橋を、皆で確かなものに仕上げて行けるよう努めゆくことは歓び、希望である。

久しぶりに札幌に戻って来て、まほろば（厚別店）のお野菜、調味料どれもが、とても美味しく、料理する事がこの上なく楽しい。
厚別店長、穂積さんにも大変ご

親切にして頂き、感謝いたします。
来年はもう少しゆっくり農作業のお手伝いができれば、と思う。収穫したツタンカーメンの豆の入った「へうげ味噌」を食する日が待ち遠しい。

本当に楽しい仁木農園訪問を、素敵な札幌滞在を、ありがとうございました。
どうぞ皆様お元気で。
またお会いできます日を楽しみにいたしております。



農業体験をしました!!

本店 バック主任
小島 侑子

まほろば慰安会で2度訪れた仁木農場。その農場から毎日お店に入荷する野菜たちを見ながら、実際に農作業を体感してみたいと思っていました。

8月の終わり、念願が叶い農業体験の機会を頂きました。
実はお恥ずかしながら、これが人生初めての農体験。



事前に今回の作業内容はジャガイモ掘り?
なんて噂もありましたが、当日は雨が降ったり止んだりのお天気で、ハウス内の作業に変更との話。

どんな作業でもとにかく初めて体験するワクワク感、お天気の悪さも気にならずただただ、楽しみに店舗主任の斉藤さんと畑へ向かいました。

到着すると社長、顧問はすでに畑で作業に取りかかっている、私たちも作業着に着替え、ハウストマトの下の葉をとる「下葉かき」を教わりました。

下の葉が茂って混み合っていると風通しが悪くなり、病気や害虫発生の原因になってしまったり、太陽の光が通らずトマトの色付きに影響する、また余計な葉があると養分が葉に回ってしまうとの理由で下葉かきが必要なのだそう、わたしたちはこの任務にさっそく取りかかりました。

とにかく見よう見まねで、せっかく大切に育てられた成長過程のトマトが、間違っただけのところを切り落としたらダメになってしまうのでは?と緊張しながら、「ここの葉は落としても大丈夫??」と苗と会話をしながら一つ一つ葉を丁寧に落とし黙々と夢中に作業を進めました。フトどのくらい進んだかなと一見すると、ハウスの一列も進んでいない。(笑)

あらあら、これはこのペースでは終わらないと思った頃には、お昼休憩の時間となり、時間の経過がとにかく速いのです。

このペースでは終わらないと容易に想像が付き、さすがに午後からの作業は少しピッチを上げました。

数をこなしていくうちに、だんだんと感覚的に掴めてきて、少し余裕も出てくると、一つ一つの苗の葉のつけ方、トマトの実の形、茎の伸び方に個性があって、その様子は人間の性格や個性と同じように感じ面白く、水を撒くとまるでゴクゴクと飲んでいるかのように、あっという間に土が吸収していく様子を目の当たりに、しその生命の輝きに触れ、嬉しくとても豊かな気持ちになりました。

その一方、農作業は手間がかかり体力と根気のいる作業だと痛感するのです。やることは沢山あり、時間がいくらあっても足りない。時間にして半日程の滞在で、ハウス一棟の下葉かき、収穫した野菜の計量と仕分けをほんの少しお手伝いできたくらいで、あっという間に帰りの時間が来てしまいました。

農作業に没頭する過程で、自然の中に自分が溶け込んだように自然と一体になった感覚を得たことがとても心地良かったこと。畑で作業していると野菜以外の生き物(虫)が共存していて、これが無農薬、無化学肥料だということ。



自家採取の種を使用しているので、形や大きさに個性がある野菜ができること。

これらは人間の力で操作しない、自然そのものの生命力であること。自然を尊重し、少し補足してあげる。

野菜たちの声に耳を傾けた栽培。これが、まほろば自然農園で実践している0-1テスト農法であり、まほろば野菜の最大の特徴なのだと、より理解が深まりました。

この体験を通じ、今まで以上に生産者様、お客様の架け橋として私ができることを精いっぱい取り組んでいきたいと思います。貴重な時間を頂きましてありがとうございました!!

まほろば自然農園の仁木農場は“多様性の楽園”だ!!

仁木農場に一日居て、一番驚いたこと。

それは、これだけの土地の広さと、これだけの野菜の品目の多さのなかで、一々全部を0-1テストで診断して、肥料を施し水やりし、

収穫、選別、計量、出荷、その全てをたった3人から4人でこなしているという事です。

もちろん、一日しか居ないなかで全てを見た訳でなく、計り知れないほどの作業があるのだと思い

本店 店舗主任
齋藤 恭兵

ます。一般の農家だと何品目かの特化した野菜を専門で作ることが多いのではないのでしょうか。

その点で、仁木農場は“多様性の楽園”とも言える品目の多さ。初めて名前を聞くような世にも珍



しい野菜まで栽培しています。

また、“命を繋ぐ”ということ
仁木農場では教えてくれます。
トマトのハウスの中には、株の所々
に赤い紐がくくり付けてあります。
それは、この株から種を採って更
新するという印。有機栽培の農家
でも、一代目は形や食味が整っ
ているが次世代に命を繋ぐことが難



仁木の「まほろば自然農園」の航空写真 Google から

しい“F1”の種を、種苗会社から
毎年買って栽培する場合がほとん
ど。
仁木農場では、当たり前が当
たり前でないなかで、本来あるべき“命
を繋ぐ”ことを毎年続けています。

本当に、尊い仕事をしていると思
います。

そんな仁木農場から出荷された
野菜を、一つひとつ大切に、お客
様に提供して行きたいと改めて感
じました。

農業研修・援農特集 まほろば主人

●援農部隊 その① 大庭奈緒子スタッフ 9月12日



その日、家内との二人だけ。一
日中、収穫に追われて、管理作
業に中々手が届かない。

そこに、仕入れ主任の大庭奈穂
子さんが研修に。

朝から夕方まで穫るだけの作業。

さすが、九州朝倉の自家農場で、
毎日いいちゃん・ばあちゃんの手
助けをしていただけあって、教え
ずして手際が良い。

おじいさんが地元の農業委員会を
立ち上げたほどの兼業農家の家庭
で育ったので、栽培のこと、料理
のこと、食べることをよく知ってい
る。要領よく、パツパツパと、動
いて片付ける。

この日は、手が無いから余計に
ありがたかった。

あの大量の品
を、一人バンに
積んで店まで運
んでくれた。
ご苦労さま。





●援農部隊その②



山田成子スタッフ

9月15日

前日波多野毅さんの講演会。
その機縁を作った山田さん。
休みをボランティアに。
枝豆の豆外しやきのこ王国出荷と

ディスプレイなど手掛けてく
れた。日常の店内では経
験できない、野菜の裏側
を手伝うことで、全体を
知る勉強になった。

この実情をお客さんに
お話したいと。胡瓜の
苦労話は、現場でないと中々理解
できない。また来てくれるとのこと。
店作りが好きで得意で、これを将
来生かしたいと。
ガンバレー。

●援農部隊 その④ 小原大輔、宮本善夫、外 山美奈子スタッフ 9月19日



男手二人と老練女性一人。
二人とも、農作業は初体験。あま
り期待は出来ない。
ところがどっこい、さすが男手と
いうもの。初めてながらどんどん



こなす。枝豆収穫から始まって、
さや外し、カボチャ拾い積みと、
かなりハードな仕事をやってくれ
て、大助かり。これが機動力とい
うものか。枝豆は、車2杯分で平
日の3倍、カボチャは500個収
穫して荷詰めまで、結構な仕事量。



よくぞやってくれました。
外山さんは、野菜の袋詰め、枝
豆の仕分けを地道に長時間の座り
仕事。その集中力は、常日頃の
陰の力の賜物であります。
ありがとう!!

●援農部隊その⑤ 新家江里香さん、小林秀 丈、洋子夫妻、富谷奈津 代&石丸枇沙子さん、有 馬みゆきさん&大西亜 美、西巻華絵、福田直之 スタッフ

9月26日

この一日に集中して沢山援農部
隊が結成された。
先ずは、会社から研修で、福田、
大西、西巻さん。次に、アメリカ





から一時帰国しているエリカさん、厚別方面から小林さんご夫婦と富谷（玉木）さんと一緒に。すると突如、石丸さんが、知友の有馬さんを連れて来られた。段取り良くミーティングして、一斉にじゃが芋掘りからスタート。どんどん畑で仕分けしながらコンテナ一杯に。

キタアカリ、インカのめざめ、レッドアンデスを。
その後、すぐに肥料撒きして、マ

ルチ貼り、そこに自家採種のニンニクを手分けして植え込む。もう一方の舞台は、豆畑。もう疾うに枯れて種が飛び出しそうになっているエジプト原産、「ツタンカーメン」の豆。6人ほどで、一気に取り終える。凄い！

人海作戦は、こうも有りがたいものか。これを一人でやっていたら、何日かかっても終わらないだろう。

二人は三脚に、三人は九脚に、

倍々数で効果が表れる。

あまりの忙しさで、到底手が出なかった豆の鞘取りが出来て、ありがとう。

でも、まだまだ花豆から虎、ウズラといくらでも残っている。何方か、鞘取り援農に!!

特に新家江里香さんは、米国から一時帰国。札幌でのヒーリングセッションの合間に来園。お話沢山お聞きしたかったが、残念。また来年お会いしましょう。最後に記念撮影。みなさん、ありがとうございます。



●尊いお仕事を見て胸がいっぱいに!

ヒデボーの橋本リカさんが、今まで何度か農園を目指したが至らず、三度目の正直で、ついに到着出来た。帰りのメールで、「みなさんの尊いお仕事を見て胸がいっぱいになりました。本当に感謝感謝で胸いっぱい泣きこらえるの大変でした」とのお言葉に、こちらもヒデボーのことを思いながら、胸が一杯になりました。「ヒデボー、お母さんを見守ってね。また一緒に来てね!」



易学の大谷修一ご夫妻、何度目かの来訪。今日はこの方向、最高の吉方とのこと。そして、その水を汲むとこれまた、運気が上がるとのこと。

これを信じるか信じないかはあなた次第となりそうですが、兎に角大地の気を吸うことは良いことです。

これから本格的な秋の収穫の時。

みなさま、お誘いあわせの上、お越しくださいませ。

番外編!

「人は死なない」

やはぎ
矢作直樹氏とご一緒に

まほろば主人



仁木農場から10分ほど
やまあい
の山間、余市町豊丘に、ま
ほろばの果物でお馴染みの
「サンケン農園」がある。

そのオーナーである山
形健次郎さんは、札幌山の
手で私設ギャラリーを開く
などアートに造詣が深いば
かりか、詩人でもあり、し
かもミネラル水を発明する
科学者であり、会社を幾つ
も持つ実業家であり、そし
て農業者でもある。

そのミネラルが、福島県
小野町産のヒル石（バー

キュムライトの原料）から
抽出したものだ。

小野町と聞けば、あの発酵
学者・小泉武夫先生の出身
地で、先日漸く邂逅された
のだ。

そして、発明時にその効

果効能を分析調査してもら
うに依頼した先が、奇しく
も今を時めく東京大学名誉
教授・矢作直樹さんだった。
20年来の友人でもある。

両日、札幌での講演会を挟
んで余市・山形さんの宿坊
りょうざんぱく
「梁山泊」での会食があった。





着いてみると、医療関係のことゆえ、ホスピスケアで著名な北海道医療大学の石垣靖子名誉教授、札幌交響楽団コンサートマスターの大平まゆみさんなどが見えていた。

「人は死なない」のベストセラーで、一躍時の人となった矢作さんは、多方面に造詣が深く政治経済にも明るく、また UFO の存在にも詳しく、さらに「天皇」の侍医であったことから皇統に関して深い見識を持たれている。

還暦を迎えられたというに、実に若々しい。節制されて自戒が厳しいの

だろう。

何十年と救急医療現場に携わって、常に死生と直面しておられた。

そこから感じられること、信じられることが、体験として死後の世界について物言いをされていたのだろう。

山海の珍味を頂きながらの会談は楽しく、その後、大平さんのバイオリンの生演奏を目の前にして聞ける好機に恵まれた。

このような近所で、贅沢な会合があったことを感謝したい。

翌日は、小樽の三枝さんをお連れしてお話が弾んだ。

誰にとっても、生死の問題は、避けて通れない、それこそ人生の死活問題でもある。

その矢作氏の対談が、THD 発行のおたよりに掲載されたものを今月号に出させてもらった。どうぞ、その一端を読まれ、生きる道しるべになりますことを。



※別紙にて印刷しています。